

北部と南部の隔絶

— フィッツジェラルド「氷の宮殿」を読む —

加藤好文

はじめに

フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald 1896-1940) が1920年代に発表した短編小説の中に、「タールトン三部作」(‘Tarleton Trilogy’) と称される作品群がある。すなわち、1920年5月22日 *The Saturday Evening Post* に掲載された「氷の宮殿」(“The Ice Palace”), 同年10月 *Metropolitan Magazine* (先の *The Saturday Evening Post* はハッピーエンドの物語を求めたためにフィッツジェラルドと折り合わなかったようである) に掲載された「ジェリー・ビーン」(“The Jelly-Bean”), そして、時代が少し下った1929年3月再度 *The Saturday Evening Post* に発表された、「南部最後の美女」(“The Last of the Belles”) の三編である。

このタールトン三部作では、焦点が当てられる主人公はそれぞれに異なっているが、彼らを含めた一群の主要人物たちが幼なじみとしてこれらに共通して登場し、彼らの恋愛や結婚をめぐる青春群像が描かれる。そして彼らが活動する共通の舞台が、アメリカ南部ジョージア州の最南端にあるタールトンという架空の町なのである。だがこの町を中心としながらも、作品ではそれ以外の地域が一つの対立軸として設定されていることも見過ごすわけにはいかない。それが同じ南部の地のこともあれば、北部のこともあり、またそこに舞台が移ることもあれば、単に背景として言及されるだけの場合も散見される。この三部作の興味深い点は、そのような他地域出身の若い男性たちとタールトンに住

む女性たちとの出会いや別れが現在のこととして、また過去の思い出として描写される中で、タールトンに代表される南部像——南部人の気質や南部の社会・風土・文化——が時の流れを踏まえて立体的に浮かび上がることである。そしてその中でも特に最初の「氷の宮殿」は、北部と南部の相違を中心テーマに据えて若い男女の出会いと別れが緊密な構成で描かれており、フィッツジェラルド初期の短編としては注目に値するものであろう。

I

「氷の宮殿」は作品名からして寒い雪国を連想させるが、タールトンに対峙するこの地の名前は明示されず、ただ“Northern city”と紹介されているのみである。そしてその地に舞台が移るのも1月半ばという真冬の一時期だけである。ただし、批評家たちが口をそろえて言うように、タールトンが作者フィッツジェラルドの妻ゼルダ (Zelda) の故郷アラバマ州モントゴメリー (Montgomery) という深南部をモデルにしているように、それはフィッツジェラルド自身の出身地である北部のミネソタ州セントポール (St. Paul) がイメージされていると考えて間違いないだろう¹⁾。事実、フィッツジェラルド自身手紙の中で、この作品の創作に至るまでの経緯を述べており、このことを裏付けてくれる。少し長くなるが、その一部を紹介してみよう。

The idea of “The Ice Palace” (Saturday Evening Post, May 22d), grew out of a conversation with a girl out in St. Paul, Minnesota, my home. We were riding home from a moving picture show late one November night.

“Here comes winter,” she said, as a scattering of confetti-like snow blew along the street.

I thought immediately of the winters I had known there, their bleakness and dreariness and seemingly infinite length....and then I stopped,

for I had scented a story.

I played with the idea for two weeks without writing a line...

At the end of two weeks I was in Montgomery, Alabama, and while out walking with a girl I wandered into a graveyard. She told me I could never understand how she felt about the Confederate graves, and I told her I understood so well that I could put it on paper. Next day on my way back to St. Paul it came to me that it was all one story – the contrast between Alabama and Minnesota.²⁾

このようにフィッツジェラルドは故郷のミネソタ州セントポールで11月の夜遅く映画の帰り、連れの子が「もう冬ね」と話始めたことから、まずは物語のヒントを得る。さらに、2週間後にアラバマ州モントゴメリーに行って女性(当時交際中のゼルダ)と墓地を散歩中に交わした会話から、南部と北部のコントラストという物語の全体像が見えてきたのである。この手紙には、さらに彼の母親から聞いた、80年代に実際に造られていた氷の宮殿を物語に取り込むアイデアなども含めて、作品の骨格がこの時に練られたことがしたためられている。

従って前以てここで要約するならば、「氷の宮殿」はフィッツジェラルドとゼルダ、そしてセントポールとモントゴメリーをモデルとして、北部の男性と南部の女性との結婚話をめぐって浮かび上がる男性対女性、北部対南部という明確な対立軸を設定した上で、特に南部女性が異質な対象(北部)への物理的及び精神的な旅を通じて自己認識に至る物語と言っても差し支えないであろう。しかもこの作品はわずか2週間程度の構想期間を経て、その後、執筆、発表まで約半年間という比較的短期間に仕上げられたものではあるが、初期短編として構成及び内容の質の高さは否定すべくもないように思われる。例えばJohn Kuehlなども、この三部作がすぐれたものであることを指摘した上で、特に「氷の宮殿」の“a quest for identity”に焦点を合わせた構成上の工夫や人物描写を評価している(Kuehl 34)。そこで以下のII章以降、女性主人公サリー・

キャロル・ハパー (Sally Carrol Happer) の行動を中心にストーリーの流れを綿密にたどりながら、地域差によって生じる彼女の精神的な弛緩状態と緊張状態の内実について考察してみる。そしてその際、彼女の「持ち前の唐突さ」(“characteristic suddenness”) という特徴を一つのキーワードにしてみてください。

II

全部で6章に分かれた本作品の第1章及び第2章はタールトンに舞台がおかれている。まず第1章は暑さの厳しい9月の午後のことである。この章は、サリー・キャロル・ハパーがノースカロライナ州アシュヴィル (Asheville) で知り合った(7月のことと推測される) 北部の男性と婚約したという噂が広まり、彼女の遊び仲間たちがその真相を本人に確かめるという展開になっている。ここでの最大のポイントは、その過程でサリー・キャロルにとっての北部の意義や南部との違いが彼女の漠然とした印象と想像のレベルで提示されることであろう。というのも、彼女はノースカロライナより北に行ったことはないのがある。まずは冒頭三段落それぞれの書き出し部分を覗いてみよう。

The sunlight dripped over the house like golden paint over an art jar, and the freckling shadows here and there only intensified the rigor of the bath of light....

Up in her bedroom window Sally Carrol Happer rested her nineteen-year-old chin on a fifty-two-year-old sill and watched Clark Darrow's ancient Ford turn the corner....

Sally Carrol gazed down sleepily. She started to yawn, but finding this quite impossible unless she raised her chin from the window-sill, changed her mind and continued silently to regard the car.... (49-50)

いずれも、南部の気候風土とそれが人間に及ぼす影響をみごとに活写した文章であり、作品の全体的なトーンを決定づけ、そのモチーフすら暗示するような書き出しである。このような冒頭の一節を読んだだけで、読者はこの南部の町や南部人に対してある明確なイメージを抱くことになる。すなわち、まだらに落ちた日陰が逆に日差しのきつさを浮き立たせるような強烈な陽光が、サリー・キャロルの家に降り注ぎ、言うなれば彼女を明るい光のイメージで包んでいる。そして19歳の彼女は52歳に当たるこのハーパー屋敷に守られ、安穩に暮らしてきたことが推察される。そこへ、泳ぎに行こうと(実は事の真相を確かめたいのだが)、同じ町に住み彼女の恋人気取りのクラーク・ダロウ (Clark Darrow) が古ぼけたフォードで彼女を誘いにやって来る。寝起きの彼女はあくびをすることすらおっくうな様子で、窓の敷居にあごを乗せたままその車をぼんやりと眺めているのである。

こうして、例えば、太陽＝強烈な光・熱気、家・車＝歴史・過去・古さ、人間＝惰眠・怠惰というような、南部のタールトンに特有の鮮烈なイメージが読者に吹き込まれるのである。この冒頭部分に続いて、さらにけだるくものうい雰囲気を湛えた言葉——「不活発」(“inertia”)と「昏睡状態」(“coma”)——を目にすると、住人と町の特徴がさらに鮮明に刻印されることになろう。こうしてまずは第1章冒頭で、サリー・キャロルはそれまでの19年間、独特な風土・文化に包まれた南部社会に守られて平穩に育ってきたことが偲ばれるのである。

だが他の者たちと違って、サリー・キャロルには別の一面も秘められていることがすぐに明らかになる。泳ぎに出かける車の中で、クラークが「ヤンキーはあらゆる点で我々とは大いに違っているんだ。(“He'd be a lot different from us, every way.”)」(53)と忠告して、北部人との結婚を思い止どまらせようとするのに対して、彼女は次のように答えている。

“...I'm not sure what I'll do, but—well, I want to go places and see people. I want my mind to grow. I want to live where things happen on a

big scale.” (53-54)

それは未知なるもの、異質なものに対する漠然とした憧れとでも言えばいいだろうか。すべてが停滞しているように見えるタールトンとは対照的に、物事が大きなスケールで動いているように思える所で暮らすことによって、心身の活動を活性化させ精神的に成長することを希求している。しかも、その後のこのような二人の会話の流れの中で、彼女の考えは一層明確になっていくのである。それは、次のような台詞の中に、より明快な意志となって反映されていることが分かる。

“...You've a place in my heart no one else ever could have, but tied down here I'd get restless. I'd feel I was—wastin' myself. There's two sides to me, you see. There's the sleepy old side you love; an' there's a sort of energy—the feelin' that makes me do wild things. That's the part of me that may be useful somewhere, that'll last when I'm not beautiful any more.” (54)

彼女の言う「二面性」とは、要するに、惰眠をむさぼる南部的世界（“old life”）と合わせて、活力（“energy”）に満ちた北部的世界（“new life”）をも希求する精神構造を述べたものであって、特に後者は、彼女の外見的美貌が失われた後にもその有用性が評価されるように思える側面なのである³⁾。従ってここに至って、彼女は自分を無駄にしないためにも南部という安住の地を離れて、激しい生の実感を肌で味わい、精神的鍛練を試みるべく北部行きを最終的に決意したことになる。

ところで、上記の引用文の後、I章で言及した“*She broke off with characteristic suddenness...*” (55) という一文が続き、彼女は突然言葉を切り眠ってしまうのである。この「持ち前の唐突さ」とはどういうことであろうか。確かに、この作品にはサリー・キャロルの言動に付随して“*sudden(ly)*”とい

う用語が多様されていることに驚かされるのであるが、他にも“quickly, immediate(ly), (for) a moment, momentary, (an) instant, instantaneous, break off, impulse”などの類義語が彼女との関連で多く用いられていることが分かる。先走って言えば、これは単に物理的な自然現象の場合もあれば、ある外的刺激に対する単なる心身両面の機敏な反応の場合もあろうが、彼女の場合、それは特に性格的特徴として彼女の精神面と強く結びついており、不安感や緊張感を助長する働きをしているように思われる。そしてそれによって、表面的には彼女は移り気で自己中心的な性格を垣間見せているが、実は以外と現実をよく見据えて行動し、併せて事の本質を突く冷静な直観力をも有していることが分かるのである。従って多くの場合、そのような特徴に則った彼女の言動をサポートするために、作者が意図的にこのような用語を伴う様々な状況を設定しているものと考えられる。このように考えると、先述の彼女の突然の変化は、南部に押し止どめようとする現状肯定派の言動によって、彼女が現在の情性的な自己を再認識し、逆に現状打破を目指す推進力を得たことを示すものに他ならない。すなわち、この時点で彼女はもはやそれ以上の言葉を必要とせず、またクラークのお節介に耳を貸さない方策としても突然話を打ち切り、目を閉じたのである。このような意味からも、ストーリーの展開上、“suddenly”の頻出は彼女の内面が休眠状態から目覚めて活発に活動を始めた表れと言えよう。

ここでもう一つ注目しておくべきは、先の引用文冒頭に示唆されているように、彼女がクラークをその代表格とする南部的なものに固執し異質なものを受けつけようとしぬ頑なな面も持ち合わせていることであろう。つまりところそれは、南部人の怠惰な習性そのものに対して、彼女自身が強い愛着を抱いている証拠に他ならないのである。これと関連すると思われることで、第2章ではあるが、次のような作者の解説がある。

Harry Bellamy had everything she wanted; and, besides, she loved him—
loved him with that side of her she kept especially for loving. Sally Carrol

had several rather clearly defined sides.(56)

先述したように、彼女は大きくは二つの側面を有しているのだが、それがさらにクラーク・ダロウ用とか、愛するハリー・ベラミー用というように幾つかに細分されて、それぞれに不可侵の関係を築いているのである。従って、一見融通無碍のようではあっても、実際、彼女は個々の領分に対して個別の対応を必要とし、延いては全人格的な破綻を来すことにもなりかねない硬直した考え方を持ち合わせているのである。

このように、第1章は形式と内容において作品の全体的方向性を決定するさまざまな要因が散りばめられた、物語の導入部としての機能を十分に果たしている。まずは、サリー・キャロルの婚約の噂を契機として、南部と北部の相違が彼女とクラークとの会話を通して提示される。しかも、一方で南部の生活を満喫しながらも、彼女の内面には北部への思いが次第に明確な輪郭を帯びてくる様子が描かれている。しかし、南部と北部の相反する「美德」を一身に獲得せんとする願望は、彼女の内面の頑ななところがその脆さと背中合わせになっており、当初から危うさを秘めていると言わざるを得ない状態なのである。

続く第2章では、噂の婚約者ハリー・ベラミーが北部の都会から訪れた11月の4日間の様子が、サリー・キャロルお気に入りの場所である、死者たちの眠る墓地を舞台として語られる。墓地を散策中、二人はマージェリー・リーという見知らぬ女性の墓石に行き当たる。‘Margery Lee, 1844-1873’ としか刻まれていないことから、サリー・キャロルは29歳でこの世を去ったこの女性の生前に思いを馳せ、南北戦争で戦死した男たちとのロマンティックな物語を夢想しているが、それは結局のところ自らをこの女性に重ね合わせているに他ならないのである。だがハリーに彼女の心情が十分に理解できないことは次の二人の会話からも察知できよう。

He stooped down close to the stone, hunting for any record of marriage.

“There's nothing here to show.”

“Of course not. How could there be anything there better than just ‘Margery Lee,’ and that eloquent date?” (57)

要するに、それは言わば目に見えるものと見えないもののいずれに価値を置くかの相違であって、そこには具体的記述に頼ろうとするハリーと語られていない空白部分を重要視するサリー・キャロルの決定的な違いが認められる。従って、マージェリー・リーの印象も彼の心に直接浮かんでくるものではなく、「君のかわいい目を見ればそれが分かるよ。（“I see through your precious eyes.”）」(58)と答えているように、あくまで彼はサリー・キャロルの表面的な反応をなぞっているに過ぎないことが理解できよう。さらに彼女は、南部のために命を捧げた兵士たち、中でも無名兵士たちの墓前で涙を流し、「それが自分にとっていかにリアルなものであるか（“how real it is to me”）」(58)を必死に伝えようとする。彼女の言に“they died for the most beautiful thing in the world—the dead South” (59)とあるように、彼女は「世界で最も美しいもの」すなわち「今は亡き南部」という、南北戦争以前の南部社会に対するノスタルジーに包まれている。その上“I’ve tried in a way to live up to those past standards of noblesse oblige” (59)とくれば、もはやハリーの感応力では対応しきれず、一言「分かるよ（“I understand”）」(59)とかわすのが精一杯なのである。このように彼女は言うなれば、過去の南部の精神を現在まで保持して生きている女性である。

しかし結局、ここで彼女は想像の翼を閉じて、ハリーとの相違には目をつぶって所期の目的に戻り、1月半ばの冬祭りの期間中に北部のベラミー一家を訪問することと3月に結婚することを思い切って約束するのである。ただこの章の最後で注目すべきは、彼女がまたもや「唐突に」“Will I be cold, Harry?...I guess I’m a summer child. I don’t like any cold I’ve ever seen.” (60)と切り出すことであろう。北部の寒さが自分には適さないのではないかという彼女の直観的危惧は、地理的・気候的な変化が精神に及ぼす影響を察知したのであ

り、この物語の結末を予示するものであることを読者に感得させるに十分である。

III

第3章の冒頭は、1月の冬祭りにペラミー一家を訪ねるために、サリー・キャロルが乗った寝台車のシーンから始まっている。“All night in the Pullman it was very cold.” (60) と書き出してあるように、まず、彼女は体感的に北の寒さの洗礼を受けるし、さらに車窓からの眺めに対しては次のような印象を抱いている。

Sometimes a solitary farmhouse would fly by, ugly and bleak and lone on the white waste; and with each one she had an instant of chill compassion for the souls shut in there waiting for spring. (61)

彼女は、荒涼たる雪国のわびしさを思い、淋しげにぼつんと佇む農家で春を待ち侘びる人々に同情心を覚えるとき、外の寒さに伝染するかのごとくブルッと「一瞬」身震いもしたのであろう。だがここでは、このような北部での心身の冷えに対する否定的な第一印象だけでなく、“she experienced a surging rush of energy” (61) とあるように、彼女はかねてより北部に期待していた、どっと押し寄せるような「活力」という美徳を寒い空気中に感得しているし、“This was the North, the North—her land now!” (61) と作者が注釈を入れて彼女を鼓舞している点にも注目しておきたい。

こうして、サリー・キャロルの新天地、北部の都会へと舞台は移っていくことになる。そこで彼女はハリーの兄夫婦ゴードン (Gordon) とマイラ (Myra) 及び名前を明示されていないハリーの両親 (Mr. and Mrs. Bellamy) と対面し、さらに歴史は浅いが高価な品々が並んだ部屋に招き入れられた際に、本能的に違和感を覚える。一方、ハリーは町には活力 (“pep”) がみなぎっ

ていると自慢し、彼女からもその同意を取りつけ、この町への愛着心を強要さえもする。彼女はハリーの強引な町の押し売りや、歴史と伝統はあるが時代から取り残された感のある南部を見下すような北部の成り上がり的な優越意識に対して、またもや「一瞬」怒りを覚えながらも自分を押さえて、“Where you are is home for me” (65) と生まれて初めてとも言える心を偽った「演技」をしてその場を切り抜けている。しかし彼女の試練はさらに続く。彼女を迎えたその夜のパーティーでは、しゃべるのはもっぱら男性たちであって、女性たちはつんと澄まして座っているのがこの町のしきたりであることを目の当たりにすることになる。ハリーがいみじくも“This is a man's country” (66) と言うように、ここは南部とは違って女性が片隅に追いやられた男社会なのである。

このようにして違和感から嫌悪感へと高じてきた彼女の北部初日の内的気分を払拭してくれるのが、パーティーに出席していたベラミー家の友人のロジャー・パットン (Roger Patton) という大学教授である。(因に、ここでも、作者は「突然の」声に彼女が振り向く形でロジャーを突如登場させている。) 彼はまさに彼女の危機を救うために現れた北部で唯一とも言える味方で、“She liked him immediately” (67) というように、彼女は「即座に」彼に好感を持つのである。事実、彼の冷静でユーモアを交えた南北批評と北部批判——例えば“freezing up” という表現を使って、人間的感情まで凍えさせているという北部批判と、笑いと涙に満ちあふれているという南部観など——のおかげで、彼女の南部的側面は守られ、その精神的バランスは回復されるのである。

続く第4章と第5章は、約2週間に及ぶ北部滞在中のサリー・キャロルのその後の試練が描かれている。まず第4章において、彼女はベラミー一家に対して好悪の感情に二分される。ハリーの父親ベラミー氏は活力と威厳に満ちた物腰と、ケンタッキー州というまさに南部と北部の境界に位置する場所に生まれ合わせた因縁からだろうか、彼女は彼に対しては言わば“old life” と “new life” の橋渡し役を期待して好意を持つのである。だが一方、女性陣には明らかに敵意 (“hostility”) すら抱いている。ハリーの兄嫁のマイラには没個性

的な性格を察知するし、ベラミー夫人に対しては、よそ者の侵入に敵意らしきそぶりを見せるこの町の典型的存在として、またサリー・キャロルのことを単にサリーとのみ呼ぶことから、彼女の人格を半ば否定する人物として、嫌悪感を覚えている。要するにベラミー夫人はサリー・キャロルが断髪にし、酒やたばこを愛飲していることなど、そのフラッパー的行動を忌避しているのである。そして当のハリーマだが抑制していた本姓を表し、「突然」二人の前方に現れただらしない男を南部人と決めつけるし、南北戦争前と比べて戦後の南部人の墮落ぶりを酷評するのである。尤も、彼が“Northern carpetbagger”まで糾弾の引き合いに出して南部人批判を展開しているのは皮肉である。結局、最後はハリーマが言い過ぎを詫げるが、不安にかられた彼女はお互いの相違を封じ込める意味でも結婚時期を来週に早めようと「突然に」彼に懇願してもいる。

しかし北部にも彼女を引きつける魅力がないわけではない。それは北部の冬の気候がもたらす恩恵である。滞在も二週目に入って、北部人同様、彼女自身の頬にも健康美を体現するような赤みがさしてきたことである。もう一つはオーケストラ演奏で南部音楽を耳にしたときのこと、彼女は次のように感じている。

Sally Carrol felt something stronger and more enduring than her tears and smiles of the day brim up inside her. She leaned forward gripping the arms of her chair until her face grew crimson.(76)

彼女の南部的特徴たる「涙」や「笑い」のレベルを超えて、何か遅しくて長続きするようなものが身内に沸き上がるのを感じて、体に力が入り顔は紅潮する。そして最後は旧南部の亡霊たちがその調べに合わせて眼前を通り過ぎ、はるかディキシーの国へと去って行く場面を夢想し、思わず別れの手を振りそうになるのである。これはまさに愛しの南部との決別を読者に意識させる行為のように思われる。

次の第5章は冬祭り最大の呼び物である氷の宮殿の場面となるが、その前に北部の冬の風景を描写した冒頭部分を見てみよう。

There was no sky—only a dark, ominous tent that draped in the tops of the streets and was in reality a vast approaching army of snowflakes—while over it all, chilling away the comfort from the brown-and-green glow of lighted windows and muffling the steady trot of the horse pulling their sleigh, interminably washed the north wind. It was a dismal town after all, she thought—dismal.(77)

雪空の下、休みなく吹きつける北風が家々から漏れ出ている明かりからその暖かみを奪い去り、そり馬の規則正しいひづめの音をかき消すのである。このような北部の「陰気な」環境故に、ライラックの花が咲き乱れ、けだるい甘美さ（“lazy sweetness”）を漂わせるあの南部特有の春ももはや見られなくなることを彼女は覚悟せざるを得ない。そのような陰鬱な思いのままそりに揺られて、「先の角を回ったとたんに、彼らの目指す氷の宮殿が目に見え込んでくるのである（“they turned a corner and came in sight of their destination”）」(78)。このような「突然の」場面の転換に彼女の精神状態はさらに激しく揺さぶられることになる。85年以来久方ぶりに造られた、その幻想的で豪華な氷の建造物に、ハリーは「美しい」を連発して興奮し、一方サリー・キャロルは本能的にその氷の中に80年代の亡霊たちが閉じ込められているような錯覚にとらわれるが、その後、光に照らされた内部に入ってみて彼女もその美しさに魅了されるのである。

しかし彼女の精神の一時的な高揚と自己抑制もそこまで、「突如」内部の明かりが一斉に消され、松明をかざしたマーチング・バンドの入場行進となって祭りが最高潮を迎えた中でも、“To Sally Carrol it was the North offering sacrifice on some mighty altar to the gray pagan God of Snow” (81) とあるように、逆に彼女は言わば ‘the sun god’ の南部と ‘the snow god’ の北部との絶対的相違を痛感せざるを得ないのである (Kuehl 36)。その後彼女はハリーに誘われ階下の迷路 (“labyrinths”) を探索するのだが、途中彼と

はぐれてしまい、一人その中をさまよい「突然」氷のように冷たい恐怖心に襲われ出口を求めて奔走する。そのとき、その場の明かりも「突然に」消えてしまう。

Then on an instant the lights went out, and she was in complete darkness. She gave a small, frightened cry, and sank down into a cold little heap on the ice. She felt her left knee do something as she fell, but she scarcely noticed it as some deep terror far greater than any fear of being lost settled upon her. She was alone with this presence that came out of the North, the dreary loneliness...It was an icy breath of death; it was rolling down low across the land to clutch at her.(83)

こうして彼女は厚さが40インチもある氷の中に一人取り残され、閉じ込められて、“she felt things creeping, damp souls that haunted this palace, this town, this North” (83) という幻覚を見るところまで追い込まれるのである。このようなパニック状態の中で彼女が想起するのはクラークたち南部人であり、南部の暖かさと夏と南部の地（ディキシランド）そのものであって、“These things were foreign—foreign” (84) と、北部の異質性、疎外感を痛感するのである。彼女が精根つきて睡魔に襲われそうになったとき、死の予示であろうか、マージェリー・リーが彼女のもとに現れる。しかし、危機一髪、まず最初ロジャー・パットン(ハリーではなく)が駆けつけてくれるのだが、彼女はついに北部での精神的緊張状態と自己抑制に耐え切れず、ハリーとの結婚の約束も反故にして帰郷を即断するのである。最後の言葉を聞いてみよう。

“Oh, I want to get out of here! I'm going back home. Take me home” —her voice rose to scream that sent a chill to Harry's heart as he came racing down the next passage— “to-morrow!” she cried with delirious, unrestrained passion— “To-morrow! To-morrow! To-morrow!”

(85)

IV

第6章の舞台は再び南部のタールトンに戻り、時は4月の午後のことである。第1章同様、さんさんと降り注ぐ陽光は「人の気力を奪うものではあっても、奇妙に心地よい熱気」となってサリー・キャロルの家を包んでいる。そして当の彼女の様子は次のように描写されている。

Sally Carrol Happer, resting her chin on her arm, and her arm on an old window-seat, gazed sleepily down over the spangled dust whence the heat waves were rising for the first time this spring. She was watching a very ancient Ford turn a perilous corner and rattle and groan to a jolting stop at the end of the walk. She made no sound, and in a minute a strident familiar whistle rent the air. Sally Carrol smiled and blinked. (86)

第1章の導入部と全く同じシーンが再現されている。彼女は少しも緊張することなく南部の環境にゆったりと身をゆだねているのである。そしてクラークの聞き慣れた口笛の誘いに応じて泳ぎに出かけるところで物語は一巡して完結している。以上のような物語の始まりと終わりから、南部の町タールトンこそがサリー・キャロルにとって最も居心地がよく、心くつろげる場所であることが分かるであろう。因に、この第6章では“suddenly”に類した語は全く使用されていない。

しかし、この南部に安住しきれない彼女のエネルギッシュな一面が彼女を北部の新興の町へと否応なく駆り立てる様はこれまで見てきたとおりである。そして彼女はその地の冬の寒さが人々を活力に満ちた行動へと促している反面、感情面の凍死状態をも生み出していることを目の当たりにするのである。光り

輝く「夏の子」を自認する彼女にとって、全く異質な北部の体験は彼女が求めた「精神の成長」に寄与するものであったのだろうか。確かに精神の一時的な緊張(高揚)状態は味わえたものの、それははなはだ疑問と言わざるを得ないであろう。本論を通じて検証してきたように、“suddenly”に代表されるような、急激な環境の変化と突然の状況の移り変わりなどで、彼女は不安感や不安定な心的状態を募らせ、最後は緊張感の糸が切れて精神のバランスを完全に崩してしまうのである。従って氷の宮殿という、技術の粋を凝らした北部飛躍の象徴も、彼女にとっては精神を疲弊させ、精神的窒息状態を引き起こす牢獄に他ならなかったのである。このような内容を考慮すれば、北部や男性とのさらに奥行きのある対比や、南部像については続く「ジェリー・ビーン」と「南部最後の美女」を待たねばならないにしても、「氷の宮殿」は三部作の最初の作品として十分にその先鋒役を果たし得ていると言えるであろう。

最後に、残り二つの作品について簡単に触れておきたい。まず「ジェリー・ビーン」の中心人物は、「伊達男」(Jelly-bean)とあだ名される、ジム・パウエル(Jim Powell)という男性である。彼は没落した南部貴族の最後の一人なのだが、今や落ちぶれ果て皆の同情を買うような暮らしに甘んじている。彼はある日幼友達のクラーク・ダロウに誘われてダンスパーティーに出かけ、久しぶりにナンシー・レイマー(Nancy Lamar)に会い、彼女にはサバンナ出身のオグデン・メリット(Ogden Merritt)という恋人がいるにもかかわらず彼女を好きになる。彼女はイギリス式の生活様式にあこがれ、このタールトンで「スタイル」をもっているのは自分だけだとも言う。ジムは彼女を愛する思いから、そのような彼女にふさわしい南部紳士として生まれ変わるために生活を立て直そうと決心する。尤も、結果的にはナンシーがオグデンと結婚して町を出てしまいジムの決意も宙ぶらりんのままとなるが、要はジムの伝統ある家系の重荷からの逃避と、最終的にその責任を引き受けようと決意するところにこの物語の意味を見出すことができるように思われる。

一方「南部最後の美女」は、一人称の語り手であるアンディ(Andy)が15年前にタールトン近郊の基地に駐屯していたときのことを回想する形式になっ

ている。タールトンきっての美女であるエイリー・カルフーン (Ailie Calhoun) は、当時如才ない19歳の娘で、アンディを含めて北部兵士たちを恋の虜にする。しかし結局、彼らは彼女をサザンベルとしてひたすら「崇拜」するという「誠実さ」には値せず、彼女のもとを離れて行ってしまふ。彼女は、南部の男とは結婚しないつもりだと言いながらも、南北戦争で南部の大義のために身を捧げた貴族の末裔として、北部人との育ちの違いは決定的な疎外要因として彼女を支配していたのである。それから第一次世界大戦も終戦となり、北部に帰還していたアンディは久方ぶりにタールトンの彼女を訪ねる。そこで切り出した彼の結婚の申し込みに対しても、彼女は間もなくサバンナの人と結婚するつもりだときっぱりとはねつけ、「わたしが北部の人と結婚できないくらいのは知っているでしょうに」(252)と最後通牒を突きつけるのである。まさに彼女は南部に生まれ合わせた自分というものを理解し、南部に殉じる南部女性としての運命を引き受けようとしているように思われる。

以上、タールトン三部作は若者たちの行動を地域や時代を越えて追う中から、南北戦争を挟んで大きく変化した南部の本質的なものを探し求める物語群である。作者フィッツジェラルド自身は北部生まれであるが、彼の妻は南部出身であって、その意味からも彼は当時南部に興味を持っていたのであろう。特に南部の女性たちはいずれの作品でもその中心にいて生き生きと描かれていることが分かる。彼女たちはその華やかさと奔放さでもって男性たちを翻弄するのであるが、ただ「氷の宮殿」で北部に行ったときのサリー・キャロルは逆に北部(人)に打ちのめされて北部の異国性を垣間見、南部(人)と北部(人)が相いれないことを痛切に思い知らされる。こうして彼女は自分を知り、自分の居場所は南部の故郷タールトンしかないことを納得するに至るのである。光の子サリー・キャロルは、灰色の陰気な北部の冬ではなく、光の国南部の夏が最も似合う女性なのである。

注

- 1) この点については、Kenneth E. Eble をはじめ、John Kuehl, Henry Dan Piper, その他の批評家たちが指摘している。
- 2) フィッツジェラルドは「氷の宮殿」を発表した直後の6月にこの手紙を出している。そしてそれが *The Editor*, 53 (Second July Number, 1920), 121-22 に掲載されている。詳しくは Matthew J. Bruccoli と Margaret M. Duggan が編集した *Correspondence of F. Scott Fitzgerald* を参照してほしい。
- 3) Alice Hall Petry はサリー・キャロルの「二重性」(“duality of self”) に関して、男女両性具有 (“androgyny”) の観点も交えて論じている。

Works Cited

- Eble, Kenneth E. *F. Scott Fitzgerald*. New Haven, Connecticut: College & U, 1963. 56-57.
- Fitzgerald, F. Scott. *Correspondence of F. Scott Fitzgerald*. Ed. Matthew J. Bruccoli and Margaret M. Duggan. New York: Random House, 1980. 61-62.
- . “The Ice Palace.” *Flappers and Philosophers*. New York: Scribner's, 1920.
- . “The Jelly-Bean.” *Tales of the Jazz Age*. New York: Scribner's, 1922.
- . “The Last of the Belles.” *The Stories of F. Scott Fitzgerald*. Ed. Malcolm Cowley. New York: Scribner's, 1951.
- Kuehl, John. *F. Scott Fitzgerald: A Study of the Short Fiction*. Boston : Twayne, 1991. 34-39.
- Petry, Alice Hall. *Fitzgerald's Craft of Short Fiction: The Collected Stories 1920-1935*. Tuscaloosa: U of Alabama, 1989. 44-46.
- Piper, Henry Dan. *F. Scott Fitzgerald: A Critical Portrait*. London: Southern Illinois U, 1965. 66-69.